

近衛歩兵第五連隊歌

一、東亜の空に風荒れて 征旅は進む三千里

護国の使命身に負いて

義士ヶ丘に生れたる 我等の近衛五連隊

二、十月菊咲く二十五日 親しく天皇賜わたる

軍旗翻る下に生き

向こう荒野に死を誓う 我等近衛の第五連隊

三、大内山の松陰に 果たす守衛の任重く

君万歳を祈りつつ 我等近衛の第五連隊

四、勲功は高し桜花 聖諭は堅く肝にあり

三ヶ年の皇国を 守護りて永久の名に生きん

我等近衛の第五連隊

復員時の私の階級は陸軍曹長でした。

マーシャル諸島ミレー島の死闘

滋賀県 佐藤 保

ひもじかと 問うも愚かぞ 此の頃は

死にたる戦友を 幸に思ほゆ

何故に吾を 生みたりと 父母迄も

恨む程心 荒べり

爆撃機 遠く去りたり ものいはぬ

体いくつぞ 硝煙の切間に

南海の 小島の砂を 紅に

染め散りゆく 姿如何につたへむ

この短歌は、マーシャル諸島ミレー島で将兵の詠まれた歌の一部である。

私は昭和十六（一九四一）年十二月末日、海軍

志願兵募集に応募し、昭和十七年初め検査合格、

横須賀海兵団へ入団、新兵教育を受けた後、館山

海軍砲術学校に入校し特別陸戦隊教育を終了した。

昭和十八年六月、第六十六警備隊付としてミレー島へ派兵された。十一月初めより爆撃が始まった。

「三時方向より敵機来襲、配置につけ」との命令がでた。滑走路にいた零戦三機が飛び立っていった。北砲台の上空かなたに大型機B 29が見えてきた。九機編隊に零戦が上から襲いかかる。敵機からいつせいに零戦に向って撃つ曳光弾が飛び交う。零戦が敵機の上の前方にいく。敵機の前方から四方に煙が吹き出す。タコ爆雷を落したとすぐ分かった。敵機が煙を出して降下していき、はるか外海のかなたに消えていった。

他の零戦は敵機の集中砲火を浴び、煙を吹いたが、敵機の前に回り敵機目掛け突っ込んでいった。零戦碎けて落ちていく。敵機も煙を出しながら外海に落ちた。落下傘が開いて落ちてゆく。櫓の上にあった通信兵が拡声器で叫ぶ「水警隊、集合」。

対空機銃についていたが高度約八メートルでは機銃はだめだ。すぐ小発に乗って外海にでた。櫓上の通信兵と連絡をとりながら二キロほど沖

にでた。落下傘を見付けた。その近くを回りながらパイロットを探す。だんだん暗くなってくる。早く探さなければと気ばかり焦る。先が見えなくなった。皆で大声をだして呼んだが返事がない。呼びながら三十分ほど探したが見つからない。

仕方なくミレー島の隣の島の外海へ着いて砂浜へ舟を引き上げた。椰子の葉を舟に被せておかないと毎日来る小型機に機銃掃射と爆弾で沈められる。椰子の葉を拾いに百メートルほど舟を放れて拾っていると、前の方で「ウーウー」と唸っているような声がある。声のする方についてみた。なんとパイロットが砂浜に上半身はいあがって倒れている。

「おい、皆んな来てくれ。パイロットがいるぞ」。皆集まった。一人が望楼砲台へ車を取りにいった。パイロットの顔は傷と黒アザではれ上り、左腕は骨折でぶらぶら、よく生きていて砂浜まで泳ぎ着いた。四年、五年と訓練したパイロットの強さをみせつけられた。

車を取りに行つた兵がトラックをもつてきた。パイロットを車に乗せ軍医の所につれていった。敵機に体当たりをしてよく生きていたと思う。神様ありがとうと祈つた。

十二月二十日、近隣のタロツ島マアキン島が玉砕、その後、小型機が毎日三十機、四十機、二度三度と空襲に次ぐ空襲で、食糧と医薬品は皆無の状況となり、地獄の毎日が始まつた。

ネズミやトカゲを食べ、木の根をかじり草を食べる。まさに飢餓との戦であつた。私たちミレー島の戦死者の六割が飢餓である。皆様が知つてゐる爆弾は破壊弾と焼夷弾だと思ひますが、ほかに色々な爆弾が有ります。時限爆弾や人馬殺傷弾、ミレー島では油脂焼夷弾がよく落とされました。ドラム缶の倍くらいの油の入つた缶を落とす。百メートル四方に飛び散り、火のついた油が防空壕の中に流れ込んでくる。

ミレー島は赤道直下で暑いのと着る物が無くなつて、皆半パン下は草履を作つて履いている。そ

れで火の中へ飛び出す。火傷は人体の三分の一を火傷したら危ないと言うが、防空壕から飛び出した戦友たちは体中の皮膚は焼けただれている。薬が無い。布で体をいわくのが精いっぱい。火傷した所が化膿し、蠅が卵を産み、蛆が這い回る。蛆をよく取つてやつた。負傷者は皆防空壕の中で寝ていたが夜中に防空壕で銃の音がしたのですぐ行つてみると、戦友は銃口を口に足の指で引金を引いて死んでいた。そばに遺書があり、これ以上皆に迷惑はかけられないから先に靖国神社に行つてゐる。最後にお母さんと書いてあつた。

ミレー島南砲台の外海は島より百三十メートルの所から沖に向つて深くなつてゐる。その深くなつた所へ三百トンほどの敵艦が「蘇州夜曲」や「支那の夜」といった歌謡曲を拡声器でジャンジャン流し、終わると「本艦は皆様方を救助にまいりました。皆様の戦友は米軍が手厚くいたわつています。食料もなに不自由なく暮しています。この機会を見逃したら皆様はこの島で餓死しなければな

りません。早くこの船に逃げてください。おーい早くこい」。

こうして度々くる船を私たちは「アドック船」といつていた。「アドック」とは島民の言葉で「こつちにきなさい」と言う意味。こうした呼び掛けに餓死するよりはと思うのか、国のため一緒に死のうと誓った戦友を置いてにげていく者、「戦友と呼びたくない」者が多くいました。敵前逃亡、逃げて行く者は撃ての命令がありました。南砲台にいた戦友は銃で狙ってみたが引金を引けなかつたと言っていました。この逃げていく兵隊にも親兄弟がいる、妻子のいる人も知れない。敵前逃亡で撃たれ死んだと聞いたら親兄弟養子はどれだけ悲しむだろうと思うとどうしても引金は引けなかつたと言っていた。私もほんとうに引金を引かなくてよかつたと思つた。もし引金を引いていたら死ぬまで苦しい思いをすと思ひます。

敵機からは降伏を勧める「ピラ」が何度も何度も撒かれました。

* 君たちが餓死したら日本が勝つと思ひますか
* ネズミやトカゲを食べていつまで戦えますか
* 君たちの現在の苦しみを内地の人は知つてい
るでしょうか

* 餓死を戦死と偽り君たちは満足して死ぬます
か

* 君たち親兄弟妻子は餓死と聞いてどう思うで
しょうか

* 神風はなぜ吹かないのでしょうか

前にも書いたが、敵機が毎日三十機、四十機が二度三度と爆撃に来る。今日も来た、機銃掃射し爆弾を落し帰つていった。二度目が来た。前に来たとき敵機めがけ撃ち上げた弾の残りの弾を撃ち、次の弾を込めようと前のめりになった時、斜め上からの機銃掃射で一三ミリ弾が背中を縫うように貫通、二〇ミリ弾が両足下真ん中で炸裂、左足親指のもとを骨折、盲貫銃創を負う。右足外クルミも破片を受けた。それでも戦友と敵機を撃ちまくつていた。敵機が去つた。戦友が私を防空壕に運

んでくれた。葉はない海水を沸騰させ傷を洗い「ガ
ーゼ」を背中 of 弾の取った穴に詰める。上から布
で押さえる。傷が化膿して蠅が卵を産み蛆がはい
回る。戦友がよく取ってくれた。

私が敵機と撃ち合つて負傷する前です。ノース
アメリカ双発の爆撃機が日本の東京を初めて爆撃
したのと同じ敵機が、南砲台上空から六機と、北
砲台上空から六機が本部の上で交差するように高
度二百メートルぐらいの所を水平爆撃。下から撃
ち上げる曳光弾がピューピューと敵機の中に吸い
込まれていく。曳光弾と曳光弾の間に三発入つて
いる鉄硬弾、焼夷弾、通常弾と面白いほどあたる。
敵機が煙を吹く、かたむく、だんだん落ちていく。
島より一キロほどの内海に墜落した。

ミレー島の望楼砲台に三十メートルほどの高い
檣を作つて、上に通信兵がいる。落ちた敵機から
「ゴムボート」で敵兵が逃げていくと知らせがあ
り、水警隊集合。よし出番だ。申し遅れましたが
私は水警隊員で上陸用舟艇の小発の乗組員で対空

機銃も持っていたが爆撃で舟は全部沈められた。
が兵隊の中に舟大工が電柱の柱を板にして舟を作
り、水陸両用戦車のスクリュウと自動車のエンジ
ンをのせ十人乗り舟ができた。この舟に五
人乗り込み敵のゴムボートに向つた。舟先に九九
式軽機関銃を据えた。陸で戦う時の私の銃です。

川口小隊長は敵が撃つてきたら撃て、用心金に
指をかけいつでも撃てる体制を取つた。敵はゴム
ボートを漕いで一生懸命逃げていく。だんだん近
くなる。小隊長がハンカチを振つた。こんどはこ
なたに向つて漕いできた。降伏しなさいとハンカ
チを振つたと思つたのでしよう。隊長もそのつも
りで振つたといつた。

ボートをロープでつなぐ。後部隊長が拳銃を持
つて警戒する。栈橋までもどつてきた。栈橋には
兵隊や軍属が三百人ほどいて関の声を上げた。捕
虜は五人、七人乗りで機内で二人死んだと言つて
いた。一人ずつ防空壕に入れ見張りが付いた。そ
の後の事はよく知らないが捕虜全員が死んだと聞

いた。食料がなく、味方の兵が餓死していた時でした。食料がないと思つた。

終戦後米兵を殺したということで米兵にたづさわつた十二人がメジュロに連れていかれた。敵の船に逃げていった者がすべて話すから皆分かつていた。司令海軍大佐志賀正成がすべて命令は私からだした。全責任は私にある。部下には責任はないと言つて自決しました。残り十一人は帰国しました。

八月十六日、戦争に負けたと聞いてガックリした。三日ほどして米国の軍船が来た。海軍大佐志賀司令より米軍に絶対抵抗しないように命令が出た。銃器は海に廃棄させられた。米兵が上陸してきた。日本兵を見て驚いた顔をしている。よくもこんなになるまで戦っていたものだ。我々ではとてもこんなになるまで戦えないといつていた。

九月二十六日第一便「氷川丸」に乗船させられた。ほとんどの兵は栄養失調患者です。軍医の説明によるとすぐ飯を食べさせると胃が破裂する。

最初はミルクに重湯、お粥とだんだんコントロールしながら胃を常食に慣らさないといけないとの注意があつた。しかし飢餓で苦しみ抜いた戦友は軍医の言葉も耳に入らず、箸を握りしめながら食卓で何の前触れもなくことされた。どうして後数日で日本に着くというのにと、皆涙が止まらなかつた。

船の中で皆とよく話し合つた。俺たちは戦争に負けたのだ、内地に帰つたら何んと言われるだろう。戦争に負けてよくもおめおめ帰つてきた、ぐらいのことはいわれるだろうと覚悟しておかねばなるまい。

しかし上陸して驚いた。通路の両側に二重三重に婦人が大日本婦人会のたすきを掛け涙を流しながら「お帰りなさい。ご苦労様でした」と迎えてくれた。私たちは戦争に負けた無念さと恥じらいで背を曲げ、うつむいて嗚咽が止まらなかつた。こうして私たち敗戦の兵を迎えてくれた。

出迎えの何百人の中には息子が戦死されたお母

さんもいただろう。また最愛の夫が戦死した若い婦人もいたと思う。昭和二十年十二月、奥湯河原の海軍病院を退院、田舎の長野県に帰る。その後、東京築地の魚河岸で五十五年夏まで働き、そして現在の所旧志賀町で息子と一緒に暮している。

毎年博多で戦友会があります。十年ほど前の話です。博多で暮している戦友が用事があつて隣町に行つた時、向こうから来る人を見てどこかで見たことのある人だと思ひ立ち止まつた。向こうの人も立ち止まりこちらを見ている。あーそうだ、戦地で仲間をおいて敵の船に逃げていった兵隊だと分かつた。向こうも俺が分かつたらしく横をむいて逃げて行つたと話してくれた。

国のため一緒に戦つて死のうと誓つた友を置いて自分だけ苦しいからといって逃げたという後ろめたさを一生背負つていかなければならない可哀相な人だと思ふ。

私は戦争の話は、戦友の死など思ひ出すのが辛く話したことがなかつたが、大津に「戦争体験を

語り合う会」があり、入会させて頂き、小学校で戦争体験の話をして戦争の悲惨残酷さ今の若い人達や子供に人の命の大切さを知つて頂くよう話をする事が、激戦を体験した者の務めだと思ひ、語り部として資料を集めて話し続けている。

【解説】

執筆者は、大正十三(一九二四)年二月生まれ、昭和十七年初め海軍を志願し合格、初年兵教育を横須賀海兵団にて終了後、館山海軍砲術学校に入學、ここで特別陸戦隊教育を終了した。

戦時中、海軍砲術学校は横須賀海軍砲術学校と館山海軍砲術学校があつた。

前者は艦艇の大型の戦艦時代となつた大正時代以降、当然砲術教育が最重要視され、兵科将校中の最優秀な学生が多数教育を受け、高級将校への栄進に伴つて大艦巨砲主義の思想が拡大され、海軍各術科学校の中心的存在として発展した。

一方後者は陸戦隊の教育、陸上砲術の実地訓練、

防空訓練を目的として、昭和十五年に海軍砲術学校の分校として設立準備が急がれ、太平洋戦争開戦の半年前の昭和十六年六月一日、館山海軍砲術学校が館山市郊外神戸村に開校した。

従来、海軍が陸上戦闘を行う場合、各兵科の戦闘員により臨時に特別陸戦隊を編成していたが、本校はその陸上戦闘員の専門家を教育しようとするものであった。

ここでは、主として海軍予備学生の一般兵科士官の陸戦教育を行い、太平洋戦争開戦と共に陸戦隊、根拠地隊、警備隊の小隊長として第一線に配備された。その教育科目は、陸戦班、対空班、化兵班に分けて専門教育を行い、一期から五期まで約千三百五十人を卒業させた。

このほか、本校では普通科練習生、高等科練習生、講習員、山岡部隊、(アメリカ逆上陸任務の陸戦隊)等が教育を受け、日本海軍の陸戦教育専門の術科学校として、広大な太平洋の各島嶼における陸戦隊要員を養成したといわれる。

しかし、戦局の逼迫に伴って昭和二十年四月二十五日をもって本校は横須賀海軍砲術学校の分校となり、七月三十一日閉鎖されている。

筆者は、ここで特別陸戦隊教育を受けているが、教育は陸軍式の教育とは全く一線を画した方針で行われていた。この学校を卒えた筆者は第六十六整備隊付としてミレー島に派遣され、昭和十八年十一月以降の敵機空襲の実情と苦勞を記している。当時日本の国防圏前衛線は相次いで崩壊しつつあり、昭和十九年一月末ごろから、米中部太平洋艦隊は、その猛襲を国防圏前衛線の東翼たるマーシャル群島に加えて来た。

この方面の日本軍の防備は第四艦隊麾下の第六根拠地隊、第二十二及び第二十四航空戦隊並びに第九百五十三航空隊がこれに当っており、地上防備もまた不十分であったが、第六根拠地隊麾下の警備隊が、クエゼリン、タロア、ウオツジエ、ミレ等に配置されていた。

しかしこれらの島は地積狭く、かつ平低で防禦

施設の構築に適しなかった。そして昭和十八年十月下旬以降、各警備隊がこれら諸島に分散配置されたが、その地上防備は、当時は未だ固まっていなかったといわれる。

昭和十六年の初年兵の思い出

東京都 前田 欽二郎

自分は昭和十三（一九三八）年徴兵検査で第二乙種第一補充兵衛生兵だった、そして三年経った昭和十六年四月五日、臨時召集令状が届けられた。それには「四月十五日国府台東部第七十四部隊に入営を命ず」とあった。当日奉公袋をさげて入隊した補充兵は二百人ほど、そのうち衛生兵としては三十人ほどだったと思う。

当時この部隊には、この一月に入隊した初年兵の一期検閲とかで、兵舎には人影もなかった。自分等は兵舎の前に並べられていた軍装に着替え、私服は風呂敷に包み見送りの家族等に渡す。その後曹長が来て「お前等疲れたろ、そこに座れ」と言う。そして「先に行った者は一般兵でお前等は全員衛生兵、今日から五月半ばまでここで一般兵訓練を行い、その後前にある陸軍病院で衛生兵と